

これまで、各方面の方に干城への思いを語っていただきました。最後は、干城のご子孫「谷 守弘」さんのお話を伺います。

「干城」とわたし 谷 守弘(神奈川県鎌倉市)



私は、干城から数えて5世の玄孫にあたります。



慶応4年(1868) 個人蔵

写真は150年前の土佐藩東征軍の石版画です。中列左から二人目が「谷干城」、前列中央「板垣退助」の膝に座ってピストルを持っている子供が、私の曾祖父「谷乙猪」で、後に干城の養子となりました。乙猪は干城より早く亡くなったため、乙猪長男「儀一」が谷家を継ぎました。祖父儀一は、戦後早くに亡くなったため、直接干城の話は聞いていません。

干城や谷家を詳しく知るようになったのは、父「元臣」の仕事が一段落して、私も四十を過ぎ、ようやく先祖の地を一緒に回り、家にある古文書を整理する時間ができてからです。

そんな折、窪川を初めて訪れたのは、土佐山田町(当時)で毎年2月に行われる「谷秦山墓前祭」と高知市にある谷家の墓参りで、高知県入りした機会に父と訪れたのが最初になります。当時は情報がなく、着いた時間も夕方近くで、町の方に伺っても「干城の生家」がどこか分かりませんでした。今から20年以上前の話です。

その後、ご縁があって町からお招きいただき、干城の生家や幼少期に育った環境のお話など郷土史家の林一将様からお

伺いすることができました。また、谷干城まつりを楽しく拝見したと、五社神社の境内や神輿の行列など、地元にも流れる静謐で豊かな時間の流れを感じたことを今でも覚えています。

今日では、郷土の皆さまが谷干城ミュージカルなどで、一生懸命干城に成りかわって、まちを育てていらっしゃる姿を拝見して、感銘をうけています。

干城については、その生きた時代や、出会った人々、土佐人らしい生き方など、さまざまな側面をもつ人物像が、共感を呼び、皆さまの中で育てられているのだと思います。

この3月には、谷干城フィギュア像除幕式にお招きいただき、皆さまが郷土の誇りとして、私共の先祖を大切にいただいていることを、誠にありがたく存じております。あらためて皆さまに感謝申し上げます。



フィギュア像落成式に干城ご子孫夫妻(前列)が集合

特集の最後は、ミュージカルで「三代目・谷干城」を演じている西村秀次さんに、干城を演じての感想をいただきます。



熊本城公演のフィナーレ

これからの「干城」のことを多くの人に知ってもらうため、手作りミュージカルの活動を地道に続け、あわよくば干城をメジャーにしたいと思えます。

三代目ということで先輩「干城」役のお二人から受け継いだ干城の人間力を表現できるのだから心配でしたが、軍人政治家として生き抜き、国の平和や民衆の生活を想う干城の心が少しでも伝わればという想いで演じています。特別な思い入れがある熊本城での公演当日は晴天の暑い中、多くの地元の方に熱心に喜んで頂き言葉にならない達成感がありました。



干城を演じる西村秀次さん

谷干城を演じて

西村 秀次(下呉地)

毎年、台地まつりの開催にあわせ「谷干城まつり」を窪川本町商店街で行っています。その目玉として地域住民で上演している「街頭ミュージカル」は来年20周年を迎えます。この10月には谷干城と縁が深い熊本城での出張公演を行いました。私は知人からの声かけによりミュージカルを盛り上げるダンサーとして協力したのがきっかけで演者となり、平成24年から三代目・谷干城を演じています。



四万十町が生んだ偉人

特集

谷 干城

KANJO TANI



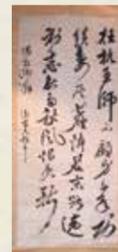
平成30年(2018)は、明治維新(1868)から150年目にあたります。四万十町通信は、幕末の志士・明治の元勳「谷干城」の生涯や史跡などを8月から4回にわたり紹介しています。最終回は、教育者、政治家として独自の道を歩んだ干城を紹介します。

谷干城の生涯

[最終回] 教育者・政治家(1877~1911) (著: 林一将)

1 干城、陸軍を去る

明治10年9月、西郷の自決により西南戦争は終わります。干城は勲二等旭日重光章を賜り、翌年、「陸軍中将」に昇進します。政府首脳、陸軍内の信頼を得る一方で、政府対応の不満から、議会開設が必要と考え、明治14年に陸軍を去ります。



「惜南洲翁」干城が西郷を惜しんで詠んだ詩

2 教育者として

高知に戻り、旧藩主・山内豊範公の依頼で「海南学校(現・小津高校)」事務総官に就任、郷土の教育に力を注ぎます。明治17年、伊藤博文は、天皇の信任が厚い干城に「学習院長」を依頼します。干城も華族教育の必要性を認識していたため、これを受けました。



伊藤博文から干城への書簡(学習院規則改正案の返信)

3 山内公を訓育

山内豊範公は、干城の「忠」「剛」の精神を高く認め、側用役・林勝好(元窪川家老職)を使者として、

長子・豊景公の訓育を干城に要請します。

干城は「私はすべての者に好かれてはもらぬ。従って山内家のためにならぬ」と固辞しますが、豊範公の強い再要請により、これを受けました。

干城は、8歳の豊景公を自宅に迎え、14年間にわたり訓育に努め、明治になっても旧主君に仕えます。



干城が訓育した「豊景公」(学習院時代)

4 初代農商務大臣

明治18年、日本最初の伊藤内閣は、天皇の意向も配慮し、干城を初代農商務大臣に起用します。翌年から大臣として、1年3カ月の間、欧米を視察し、干城は国民の利益を考えない政治と「鹿鳴館」に代表される実力を伴わない欧化主義は国を滅ぼすと認識します。

帰国後、政治改革や条約改正反対を求め「意見書」を内閣に提出します。しかし、採択されず決然と農商務大臣を辞職しました。



農商務大臣任官辞令書

5 貴族院議員

明治23年、帝国議会開設後は、貴族院議員として国会発展に尽力します。議員としての干城は、国民の困苦を顧みない政策や国を危うくする戦争に反対するなど、大勢に流されずに論戦を展開します。また、日本最初の公害問題「足尾銅毒事件」では、救済の大英断を内閣に求めるなど、被害民側に立ち続けました。



政治家・谷干城

6 干城の晩年

干城と価値を共有する家族は、彼の何よりの支えでした。その干城を支えた妻「くま子」が明治42年に死去してからは、病が進み、ほとんど病床にあつたようです。



干城と家族(前列左から2人目 干城)

干城は、「余が死せば、青山の齋場に運ぶを要せず。粗末な棺に入れ赤毛布に包み庭先に仮小屋を設け、親戚一同告別すべし」と遺言を残しました。そして明治44年5月、享年75歳で生涯を閉じ、明治も翌年に終わります。(おわり)